鹿沼市災害ボランティアセンター

活動記録

平成 29 年 3 月

社会福祉法人　鹿沼市社会福祉協議会

－ 目　次 －

はじめに　Ｐ　1

1　概要　Ｐ　2

2　気象状況
　２－１　台風１８号の経過　Ｐ　2
　２－２　大雨の状況　Ｐ　2

3　鹿沼市における被害状況等
　３－１　被害状況　Ｐ　3
　３－２　被災者支援　Ｐ　3
　３－３　義援金・寄附金等　Ｐ　3
　３－４　課題対応　Ｐ　3

4　鹿沼市社会福祉協議会の取り組み
　４－１　災害ボランティアセンター設置・活動経過　Ｐ　5
　４－２　ボランティア受け入れ状況　Ｐ　6
　４－３　支援活動内容　Ｐ　7
　４－４　各班の動き　Ｐ　7

5　検証作業
　５－１　検証委員会等　Ｐ　9
　５－２　検証結果　Ｐ　9

資料1　平成27年度台風第18号経路図･位置表　Ｐ１４
資料2　地上天気図･気象衛星画像　Ｐ１５
資料3　降水量分布図　Ｐ１７

ギャラリー　Ｐ１８～２４

新聞報道　Ｐ２６～３５

□■　はじめに　■□

平成27年9月9日から10日にかけて、台風18号によって大雨・洪水被害がもたらされ、鹿沼市においても、多くの家屋が床上・床下浸水等になっただけでなく、農業や商工業被害が多数発生しました。また、日吉町地内において尊い人命が 1 名失われるなど、市始まって以来の大規模災害となってしまいました。

後に「関東・東北豪雨水害」と命名されたこの災害に際し、鹿沼市社会福祉協議会（以下「鹿沼市社協」という。）では初めて災害ボランティアセンター（以下「センター」という。）を 9 月 10 日に立ち上げ、全国各地から 6,476 名ものボランティアの皆さんを受け入れ、民家最優先の原則の下、428 件もの被災家屋の復旧支援に取り組みました。床上・床下の泥出しや家財道具の運び出し、流れてきた瓦礫の撤去等の通常支援だけでなく、被災者に寄り添う形で行われた訪問・傾聴活動等にも力を入れてきました。全国から駆けつけていただいた 6,476 名のボランティアの皆さんに加えて、栃木県社会福祉協議会をはじめとする県内市町社会福祉協議会の皆さん、足立区社会福祉協議会や前橋市社会福祉協議会等をはじめとする県外市町社会福祉協議会の皆さん、さらには鹿沼市ボランティア連絡協議会（以下「鹿沼市ボ連協」という。）や災害ボランティア「チームかぬま」、鹿沼青年会議所、宇都宮大学の学生さん等々・・・大変多くの関係機関の方々に助けていただいたからこそ、何とか復旧支援をやり遂げることが出来たのではないかと思っています。

もう 2 度とこのような災害が起きないことを祈るばかりですが、平成 27 年 11 月末日をもって閉所したセンターの活動を総括することで、今後に生かせればと思い、あらためて振り返ることとしました。この活動記録はその集大成です。ふるさと鹿沼において災害があったことを決して忘れないために、さらには再び災害が発生した場合には、今回以上の支援ができるようにするためにも、この活動記録を生かしていきたいと考えています。

鹿沼市社会福祉協議会
鹿沼市災害ボランティアセンター

鹿沼市災害ボランティアセンター　運営方針

思いをつなぐ
みんなのボランティアセンター

1. 概要

平成27年9月7日21時に沖ノ鳥島の東の海上で発生した台風第18号は、日本の南海上を北上し、9日09時半頃に東海地方に上陸した後、日本海に進み、同日15時に温帯低気圧に変わった。この台風による直接的な被害は大きくなかったものの、日本海を北東に進む台風から変わった温帯低気圧に太平洋上から湿った暖かい空気が流れ込み、後に台風17号周辺からの南東風が主体となり、湿った空気が流れ込み続けた影響で、多数の線状降水帯が次々と発生し、関東地方と東北地方では記録的な大雨となった。9月7日から11日までの総雨量は、関東地方で600ミリ、東北地方で500ミリを超えたほか、9月の月降水量の平年値の2倍を超える大雨となったところがあった。

この大雨に対し、各地の気象台では、栃木県、茨城県及び宮城県に対して大雨の特別警報を発表して最大級の警戒を呼びかけたほか、大雨や洪水の警報・注意報や気象情報等を発表して警戒を呼びかけた。しかし、結果的に土砂災害・浸水・河川の氾濫等が発生し、宮城県、茨城県及び栃木県で死者8名の人的被害となった他、関東地方や東北地方を中心に損壊家屋4,000棟以上、浸水家屋12,000棟以上の住家被害が生じた。また、ライフライン・公共施設・農地等への被害及び交通障害が発生した。9月9日から11日にかけて関東地方及び東北地方で発生し甚大な被害をもたらした大雨について、気象庁は「平成27年9月関東・東北豪雨」と命名した。

2. 気象状況

2-1 台風18号の経過

平成27年9月7日21時に沖ノ鳥島の東の海上で発生した台風18号は、日本の南海上を北上して東海沖へ進み、9日09時過ぎに愛知県渥美半島を通過した後、同日09時半頃に愛知県西尾市付近に上陸した。その後、台風は引き続き北上して日本海に進み、同日15時に能登沖で温帯低気圧に変わった。

2-2 大雨の状況

台風18号や前線及び台風から変わった低気圧に向かって南から湿った空気が流れ込んだ影響で、西日本から北日本にかけて広い範囲で大雨となり、9月7日0時から10日17時までのアメダス観測値によれば、24時間雨量として10日の朝までに栃木県の日光市五十里で551.0ミリ、日光市今市で541.0ミリなど栃木県内の各所で300ミリ以上を観測。また、期間降水量は今市で645.5ミリ、五十里での622.0ミリ、土呂部の561.5ミリ、鹿沼の523.0ミリなど栃木県の各所で400ミリ以上を観測した。9月7日から9月11日までに観測された総降水量は、関東地方で600ミリ、東北地方で500ミリを超え、9月の月降水量平年値の2倍を超える大雨となったところがあった。9月10日0時20分の段階で、気象庁は栃木県全域に対して大雨特別警報を発令し、最大級の警戒を呼びかけた。

※出典：気象庁・ウィキペディア

3. 鹿沼市における被害状況等について　（出典：鹿沼市）

3-1 被害状況

(1) 人的被害　死者1名　重傷者1名　※市内日吉町地内で発生した土砂崩れによる

(2) 建物・道路被害

建物全壊：18件　建物半壊：27件　　道路損壊・土砂流失・がけ崩れ：288ヵ所

床上浸水：361棟　床下浸水：872棟

(3) 農業被害

被害金額：約5億400万円　※水稲・そば・はとむぎ・イチゴ・ニラ・洋ラン等

面積：約339ha

(4) 商工業被害

被害件数：81件　被害金額：約1億3,250万円

3-2 被災者支援

(1) 避難所設置

平成27年9月9日（水）18：50より順次設置

菊沢コミュニティセンター他31ヵ所　最大926名

→ 平成27年10月3日（土）菊沢コミュニティセンター避難所閉鎖により全避難所閉鎖

(2) 住宅等建物被害に対する主な支援

①被災者生活再建支援法に基づき、全壊世帯に対して最大300万円支給。

②市災害見舞金として、半壊30万円、床上浸水10万円、床下浸水1万円を支給。

③被災住宅復旧支援事業補助金として、補助率10/10、上限20万円を支給。

(3) 災害ごみの受け入れ状況

受け入れ件数1,782件　重量1,323ｔ　処理済み重量1,323ｔ

3-3 義援金･寄附金等

(1) 義援金　327件

(2) 寄附金　55件（ふるさと納税含む）

(3) 寄附　　61件（団体47件・個人14件）

3-4 課題対応

(1) 防災体制の強化

①災害時の迅速かつ的確な対応を図るために、職員の防災意識の高揚と防災体制の再構築が課題。

〔対応策〕　・庁内各班の構成と所掌業務の見直し　・配備体制の見直し

・職員研修の実施　　・防災協定の締結促進

②災害対応業務と通常業務の関係性について、あらかじめ整理した業務継続計画（BCP）を策定することが急務。

〔対応策〕　今年度中に業務継続計画（BCP）の策定に着手。

③風水害時に備えた事前防災行動計画（ﾀｲﾑﾗｲﾝ）を策定することが急務。

〔対応策〕　今年度中に事前防災行動計画（ﾀｲﾑﾗｲﾝ）の策定に着手。

(2) 情報収集体制の整備

①情報の収集と集約までの各種業務を円滑にすることが急務。

〔対応策〕　・情報収集、集約、記録に関する「情報班」の役割の明確化と1部屋での集約化の実施

・収集された情報の一元管理と、災害情報の適正開示の実施。

(3) 情報伝達体制の充実

①伝達方法及び内容の充実・強化

〔対応策〕　・ケーブルTVの活用による伝達放送内容の充実

・土砂災害警戒情報については、さらにわかりやすく提供

・粟野防災無線活用による防災情報の提供

・新たな発令判断支援システムの調査研究

・携帯を持たない市民に対する周知方法の検討

②外国人に対する災害情報等の適正な伝達

〔対応策〕　・災害多言語支援センターの設置支援

・災害時の備えに関する多言語対応DVDの作成

(4) 避難所対策

①避難所の開設をより迅速に行うことが必要

〔対応策〕　・避難所直行職員の配置の見直し

・避難所担当職員の研修の実施

・愛がん動物への対応　・一時避難所の増設

②外国人の避難に対する防災意識の高揚

〔対応策〕　避難所体験プログラムの実施

③災害対策本部と避難所の連絡手段の確保

〔対応策〕　発信専用の特設公衆電話の設置促進

(5) 資機材の整備

①1ヵ所で土嚢袋を保管していたため、配布に時間がかかってしまった。

〔対応策〕　1ヵ所集中による土嚢袋保管場所の改善

(6) 備蓄品の整備

①各自治会による自主的な避難所への備蓄品の配布要請に対する対応

〔対応策〕　自主避難所への備蓄品の配備

②幹線道路冠水により、避難所への備蓄品配布に時間がかかった。

〔対応策〕　地区避難所及び避難所への備蓄品の再配備

4. 鹿沼市社会福祉協議会の取り組み

4-1 災害ボランティアセンター設置・活動経過

平成27年9月10日（木）16：00　第1回運営会議開催

9月9日（水）夜、職員間で連絡を取り合い、台風18号による大雨の情報共有を図ると共に、10日（木）出勤時に通勤経路上の状況確認を行うことを確認した。出勤後、情報を持ち寄って被害状況を確認。既に、この時点で鹿沼市による避難所がコミュニティセンターや小学校等に設置されており、市内全域に避難勧告も発令されていた。いくつかの避難所に多くの市民が避難してきていることや、情報収集中に黒川・行川・武子川・西武子川・小藪川が越水していたこと、さらにはその影響でいくつもの道路が冠水していたこと等から、通常の体制では対応不可能と判断。センターを設置し、多くのボランティアの協力が必要との結論に至った。災害ボランティアセンター活動計画に基づき、運営会議を開催。情報共有・分析を行いながら、同日17：00センターの設置を決定し、鹿沼市災害対策本部（以下「市対策本部」という。）に設置の報告をした。

平成27年9月22日（火）15：00　第2回運営会議開催

当初2週間の予定であったセンターの設置期間延長について協議。この段階では、いまだ多くのボランティア派遣要請が上がってきている状況で、多くの案件を抱えていたことから、期間を定めずに当面の間延長とした。

平成27年9月29日（火）15：00　第3回運営会議開催

ボランティア派遣要請の残数が減少してきたことや、要請内容の変化等を受け、今後のセンター活動内容を協議。泥出し・片付け等の従来型の支援内容や、各種受け入れ体制は10月9日（金）までとすることが決定された。10月10日（土）～10月12日（月）は鹿沼秋まつりが開催され、市内に交通規制が敷かれ、混雑することが予想されたため、ボランティアの受け入れ・派遣を一時休止とし、10月13日（火）以降の活動のために、情報整理と体制の再構築を図ることにした。傾聴や被災者への寄り添いを中心とした生活支援型に移行するために、“生活応援窓口”を新たに開設することも合わせて決定された。

平成27年11月1日（日）13：30　第4回運営会議開催

この頃になると新規のボランティア派遣要請も上がってこなくなり、残数自体もかなり減少していたため、11月30日（月）付でセンターの閉所することを協議。10月13

日（火）から実施していた生活応援窓口による生活支援型をさらに発展させ、宇都宮大学の学生の協力をいただきながら、きめ細やかな終わり方を目指して再訪問を実施することにした。

平成27年11月30日（月）15：00　第5回運営会議開催

本日付けでセンターの閉所を確認し、市対策本部に閉所の報告をした。ただし、再びボランティア派遣要請が上がってくることも考えられたため、その場合は通常のボランティアセンターの機能で対応することとした。また、今後、同様の災害が発生した場合に備えて、今回の活動の検証作業を行うことも、合わせて確認した。

平成28年9月9日（金）18：00　キャンドルナイト開催

全国各地から駆けつけていただいた6,476名ものボランティアの方々のご協力をいただきながら、延べ428件の被災世帯への支援を、何とかやり遂げることができた。しかし、これで終了ではない。災害があった事実に変わりはない・・・被災された方々に寄り添いながら、キャンドルの明かりと共に、2度と災害がないことを祈りつつ、普段から助け合いの輪を広げ、みんなが災害発生に備えることで、『安心して暮らせるまち“かぬま”』を創り上げて行くために、『キャンドルナイト』を開催した。

4-2 ボランティア受け入れ状況

(1) 開設日数　　53日間　※開設日数：ボランティア受け入れ日数

(2) 受入人数　　延べ6,476名（1日平均123人）

(3) ボランティア団体受け入れ件数　　160団体

(4) ボランティア派遣件数　　428件

(5) 主な協力団体

①事務局運営・コーディネート関係

日本財団・レスキューストックヤード・にいがた災害ボランティアネットワーク・災害ボランティア活動支援プロジェクト会議・荒川区社協・足立区社協・前橋市社協・大津市社協・丹波市社協・深谷市社協・栃木県社協・県内市町社協・とちぎＶネット・鹿沼市ボ連協・チームかぬま..... 等

②現場

鹿沼ＪＣ・宇都宮ＪＣ・神奈川県ボーイスカウト・かながわ 311 ネットワーク・連合栃木・鹿沼市役所職員有志一同・鹿沼秋まつり若衆会・四日市市社協・静岡市社協・県内市町社協・宇都宮大・広島大学・岩手県立大学・日本体育大学・宇都宮高校・鹿沼高校・黒羽高校・鹿沼市ボ連協・チームかぬま..... 等

4-3 支援活動内容

(1) 災害ボランティアの派遣

床上・床下浸水等の被害に遭った住宅の復旧のために、災害ボランティアを派遣した。ボランティアが活動する上で、安全が確保できる状況にあるかどうか事前に確認した上で、派遣の調整を行った生活応援窓口開設後は、相談援助業務と並行して支援活動を行った。

作業内容：①家屋内の土砂の除去②家具の撤去③ゴミ出し・・等

(2) 生活応援窓口の開設

ボランティア派遣ニーズ件数の減少や内容の変化等を考慮し、平成 27 年 10 月 13 日（火）からは、センターの機能を、従来型の支援内容から生活支援型に移行した。被災者に寄り添う形で相談援助業務を行い、関係機関や必要なサービスにつなげる支援活動を行った。

(3) 災害援護資金の貸付

災害を受けたことにより、臨時に必要となる経費として、栃木県社会福祉協議会（以下「栃木県社協」という。）の貸付制度である生活福祉資金の中で、「災害援護資金」の貸付を実施。相談及び申込み窓口は鹿沼市社協が担った。

内容：貸付限度額 150 万円　償還期間 7 年以内

(4) ナースボランティアの派遣

看護師の資格を持ったボランティアと鹿沼市社協ケアマネが組んでの巡回訪問を実施。健康チェック等を行い、必要に応じて地域包括等につないだ。

(5) 大学生等による被災者宅訪問活動

災害ボランティア活動支援プロジェクト会議提供の「うるうるパック」を活用し、被災者宅を訪問することで、被災者に寄り添う生活支援活動を実施した。

4-4 各班の動き

(1) 受付班

センター敷地内に設けた仮設テントで受付。ボランティア保険に加入しているか否かによって受付を分けていた。ボランティア保険加入済みの受付では、初回と2回目以降を分けた。午前中の早い段階で受付自体は基本的に終了するので、その後は規模を縮小し、受付簿の整理と事前登録者がいれば、ニーズ班・マッチング班との調整が必要。ボランティア活動が終了する頃に合わせてうがい薬の準備も行った。

(2) ニーズ班

被災世帯からボランティア派遣要請があったら、ボランティアが 2次災害に遭わないようにするために、基本的に現地調査を行う。現地調査によって、ボランティアが何人必要か？道具は何を持って行けば良いのか？等を判断し、マッチング班に伝える。

(3) マッチング班

ニーズ班から上がってきた案件と、受付終了したボランティアを結び付ける。その際、ボランティアの中にどんな資格・特技を持っているのか？どんな経験があるのか？グループなのか？個人なのか？等を判断してマッチングさせる。マッチングが始まるまでの間（待たせている間）は活動上の注意を確認させたり、現場の説明を行う。

(4) 資材班

マッチングが終了したボランティアが、現地に行く前に道具（スコップ・一輪車・土のう袋等）を渡す。ニーズ班との連携が上手く行かないと、どの道具をどれだけ持って行けば良いのか分からなくなる。在庫管理や手入れも重要。ボランティアが活動から戻ってくる時に合わせて、長靴洗い場の準備もする。

(5) 総務班

高速道路減免申請やボランティア用の駐車場、バス・軽トラックの手配、車中泊用の場所、入浴可能施設の情報提供、各種消耗品の調達等多岐にわたる。予算の管理や助成金の申請も重要な役割である。ボランティアが活動から戻ってくると、高速道路減免申請が始まるので混雑する。

5. 検証作業

5-1 検証委員会等

(1) 平成28年1月8日（金）17：15　第1回検証委員会開催

約3か月間にわたるセンターの活動を振り返り、次の活動に備えるため、また第2期鹿沼市災害ボランティアセンター活動計画の策定に反映させるために、鹿沼市社協職員・鹿沼市ボ連協・チームかぬま・市防災担当に加え、オブザーバーとして栃木県社協・宇都宮大学等をメンバーとして、検証委員会を開催した。計9回の検証委員会を開催すると共に、活動計画改訂のために委員会内にワーキングチーム（以下「ＷＴ」という。）を立ち上げた。

(2) 平成28年6月24日（金）17：30　第1回ワーキングチーム会議開催

災害ボランティアセンター活動計画改訂の具体的な議論のため、検証委員会内でＷＴの設置が提案された。地域福祉課の職員を中心にメンバー6名が選出され、改訂作業にとりかかった。活動計画の中で定められている書式類見直しのためのＷＴも立ち上がり、計11回の会議を開催した。

5-2 検証結果

(1) 受付班

〔問題点〕

①ボランティアに協力を頂いたが、対応しきれない部分もあった。

②ボランティアで対応出来た事は良かったが、その分担当職員が空いた時間に兼務も可能であると思う。

③ボランティア保険の受付だけではなく、保険対応の案件に関する事務処理も受付班で対応可能かもしれない。

④受付時間を決める。（他の班の動きもそれに連動するので。）
⑤業務範囲や他の班との連携も必要。
⑥ホテルのコンシェルジュのように、受付ですべての情報を伝えられるようにマニュアルが必要。
⑦各班の権限の範囲は、ある程度詰めておく必要がある。

・・・等

〔改善点〕

①朝の受付開始時には混雑するので、ある程度長期間活動できるボランティアを確保して対応する。また、他の班のメンバーが臨機応変に手伝う。
②受付時間を決める事は難しいが、受付時間外に来たボランティアへの対応も重要なので、柔軟に対応して行く。
③業務範囲や権限をある程度詰めておく必要はあると思われるが、きっちりした線引きは難しい。各班が重層的に連携していくことが必要。
④今回の検証作業の成果としてマニュアル改訂を行うが、マニュアルに縛られないように訓練を行う必要がある

・・・等

(2) ニーズ班

〔問題点〕

①行政との役割分担が上手くできていなかった。ボラセン設置の判断は行政が行うことになっているはず。被害状況の把握もして欲しかった。
②ニーズ調査を行う人によって、その内容に差異ができてしまった。
③初期の頃と、中盤～終盤の頃では現場での支援活動に差が出た。
④埋もれてしまったニーズがあったのではないか。
⑤市社協のビブスを着用していたボランティアが職員と間違われることがあった。

・・・等

〔改善点〕

①設置の是非は社協から持ち上げる形も可能にする。被害状況の把握については、市対策本部との連携を充分行い、ミーティングの場を活用することで情報共有を図る。
②マニュアルありきだと柔軟な調査ができない。様式を見直して、必要最低限のことは必ず聞けるようにすると同時に、継続した研修を行っていくことで、各職員が身につけられるようにする。
③運営する市社協として、戦略を立てることができず、その場しのぎのような形が多くなってしまった。市社協として戦略を立て、慣れてきたボランティアの力を有効活用する。
④市社協として住民への周知を徹底すると共に、地区社協（自治会・民生委員等）

と平常時から関係性を保ち、地域の実情を把握することに努めることで、埋もれてしまうニーズが出ないようにする。

⑤市社協のビブスは職員だけが着用し、ボランティアには別の物を着用してもらうようにする。

・・・等

(3) マッチング班

〔問題点〕

①マッチング時にボランティアからの質問（現場の状況等）に答えることが出来なかった。

②ボランティアを会議室に集め、手挙げ方式でマッチングを行ったが、他のやり方もあったのではないか。

③ボランティアが最も多かった時（シルバーウィーク時）に、1時間待たせてしまったこともあった。

④マッチングする時に、ニーズ表を見ただけではわからないことも多かった。

⑤最初は、マッチングの仕方が良くわからなかった。

・・・等

〔改善点〕

①時間的余裕が出来た時に現場を確認したり、状況に応じて担当変更を行い、他の班の業務を経験することも必要と思われる。

②ニーズを貼り出して、ボランティアが自分に合うと思われる案件に応募するといった方式も考えられる。ニーズ数やボランティア数等を考慮して、判断する。

③迅速なマッチング作業も必要だが、必ずしも待たせることが悪いことではない。その時間を利用して、被害状況を伝えたり、活動上の注意をしたりするなど時間の使い方を工夫する。

④必要資材や被災家屋の状況等に加え、継続案件であればどこまで完了しているのか等の情報もわかるように、書式の見直しを行う。

⑤外部支援者に多く入ってもらった時に、やり方を教えてもらうことができた。研修を継続して行い、スキルアップを図る。

・・・等

(4) 資材班

〔問題点〕

①石灰・カルチャンパワーの使い方がわからなかった。

②寄附物品（特にタオル）の置き場に困った。

③資材が返ってこなかった。また、貸出先や返却確認について、9割程度しかできなかった。

④運搬用車両の確保が上手くできなかった。他の資材についても、必要数と在庫

数の差に隔たりがあった。

⑤センター立ち上げは早かったが、資材の準備が追い付かなかった。

⑥センターの広さ・規模・資材保管について、適切だったのかどうか疑問。

・・・等

〔改善点〕

①研修を行うことで使い方を理解する。

②送られてくる量の見通しを立てて、予測して置き場所を設定する。また、資材・物資は集め方が重要なので、必要量を確保できたら、ストップをかけることも必要。

③資材は“消耗品”なので、全て帰ってくるものではないととらえるべき。

④予算や必要数の関係もあるので、総務班やマッチング班と連携して調整が必要だが、ある程度は差が生じても仕方がないととらえるべき。

⑤借りる場合には、にいがた災害ボランティアネットワークや災害ボランティアプロジェクト会議等の関係団体に連絡をする。買う場合は、鹿沼市社協の災害ボランティア事業の予備費や善意銀行の指定なし預託、更には日本財団や栃木県共同募金会への助成申請も活用する。

⑥災害の規模や範囲によっては、第2・第3の敷地（保管場所）が必要になることも考えられる。平常時より考えておく必要がある。

・・・等

(5) 総務班

〔問題点〕

①電話やメール等の受け付けだけでなく、苦情やトラブルの対応に苦労した。

②高速道路減免申請について、ボランティア活動終了後に集中して大変だった。

③ボランティア派遣について、日付指定の対応に苦労した。

④駐車場の確保が大変だった。

⑤軽トラックの調整を総務班で行っていたが、台数が適切だったのか疑問。

⑥社協でセンター開設していることの周知は、ホームページやケーブルテレビ等を活用したが、そのような媒体を見られない環境にある人への対応は？

・・・等

〔改善点〕

①ホームページを積極的に更新することで、電話やメールの件数がかなり減った。センター機能を2階に移し、携帯電話の導入を図ったことで作業効率もあがり、トラブル等も減った。

②他班との連携で、この時間帯の受付班の増員を検討する。受付班との統合も考えられる。

③指定日のボランティア事前登録がどれだけあるのかにもよるので、マッチング

班との連携が必要。

④周辺の企業・関係団体等との連携が必要不可欠なので、平常時から連携しておく必要がある。

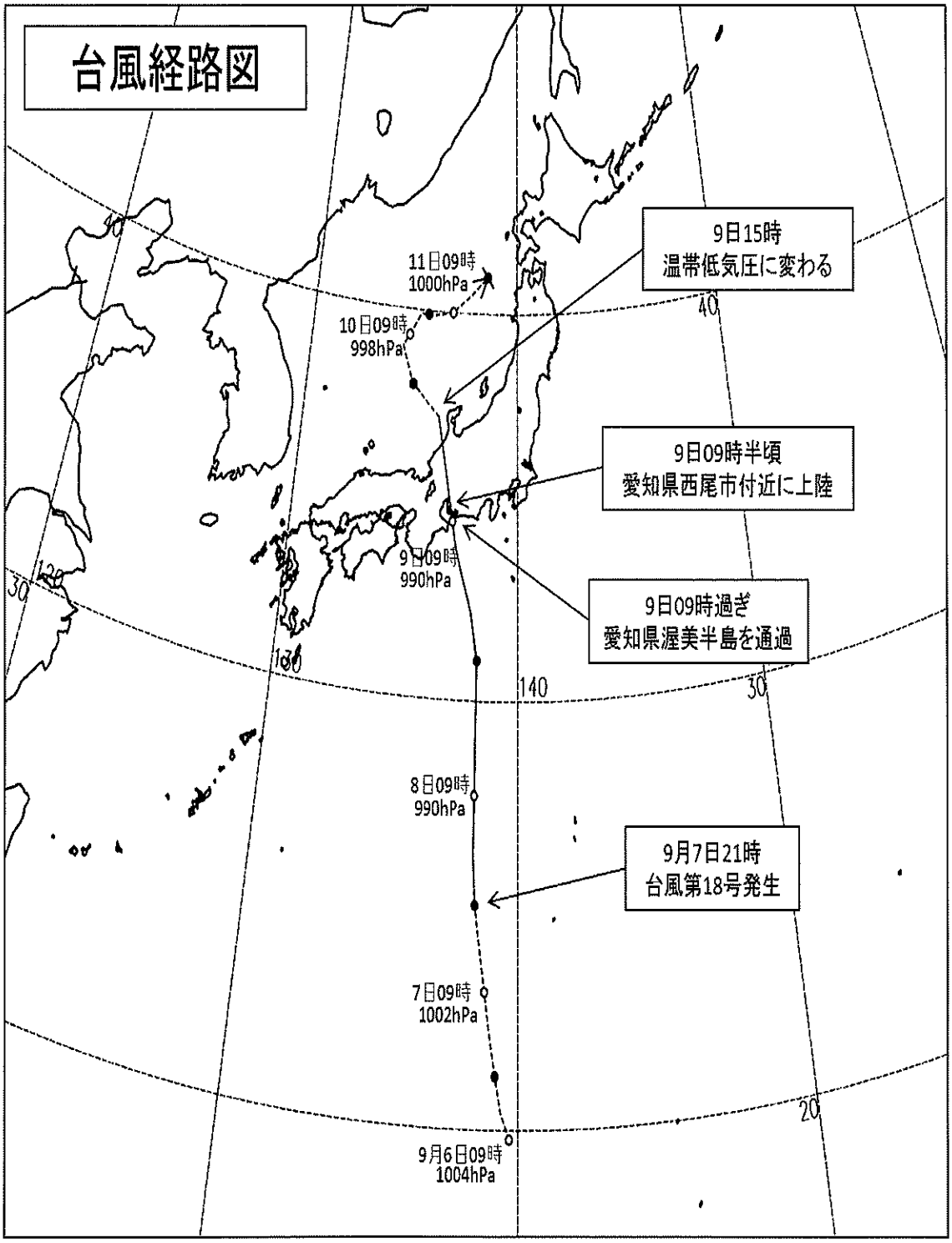
⑤今回の水害の規模であれば適切だったのではないか。なければないなりに対応するしかない。

⑥チラシ等を作成し、広く住民に周知したり、平常時から周知しておく必要がある。

・・・等

資料１　平成27年台風第18号経路図・位置表（出典：気象庁）

平成27年台風第18号位置表

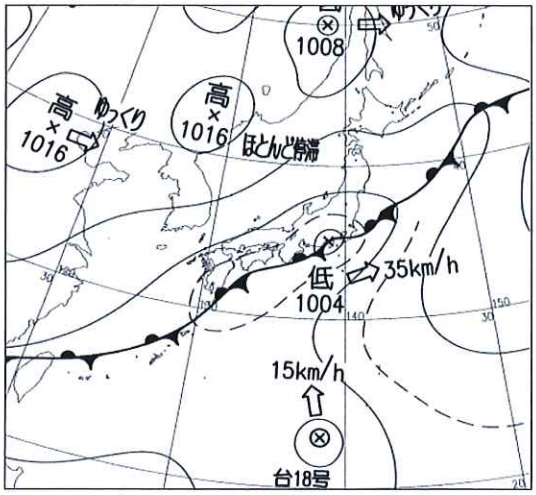


経路上の○印は傍に記した日の9時、●印は21時の位置を示す。

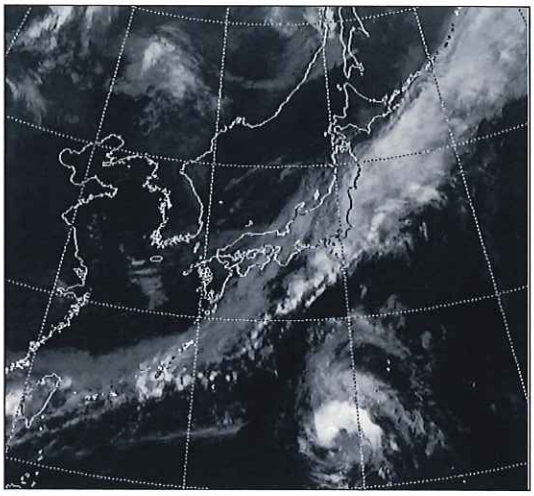
また、経路の実線は台風、破線は熱帯低気圧または温帯低気圧の期間を示す。

資料２　地上天気図・気象衛星画像（出典：気象庁）

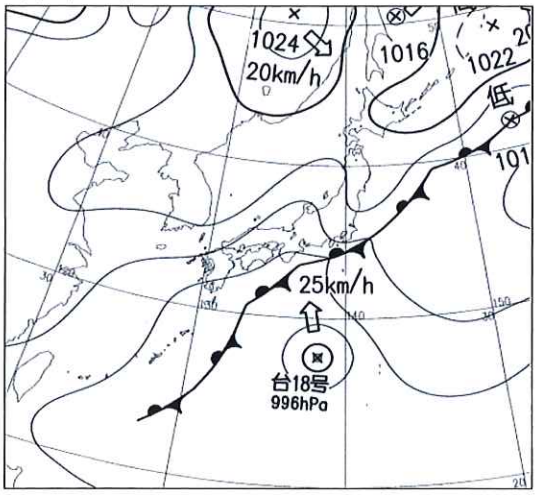
9月7日9時



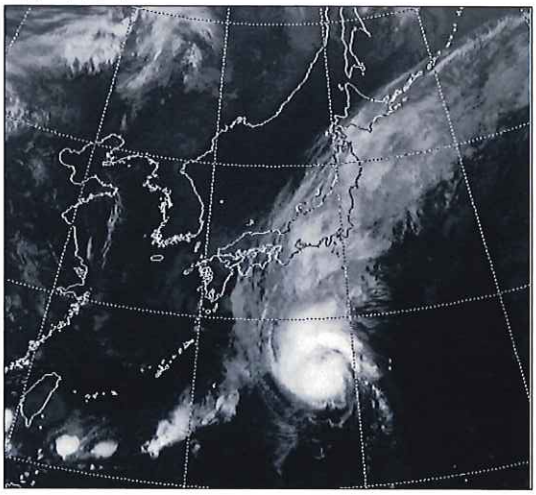
9月7日9時



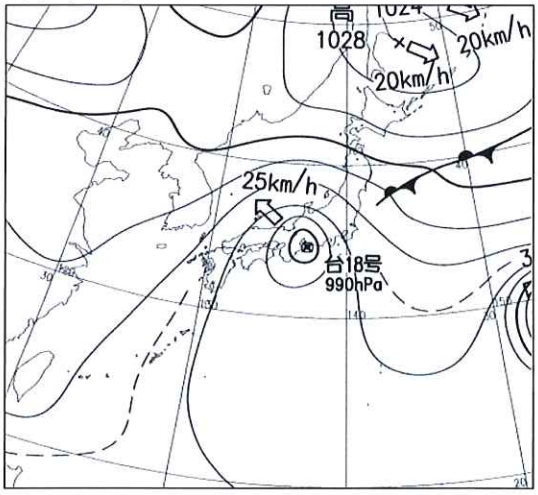
9月8日9時



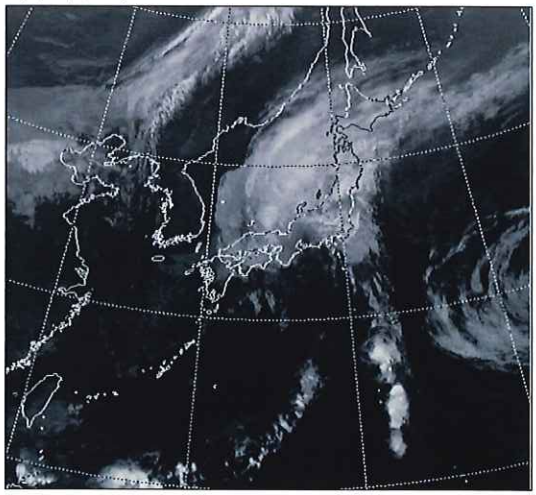
9月8日9時



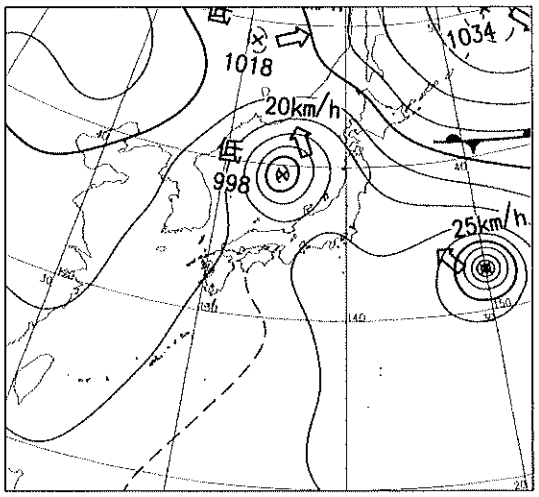
9月9日9時



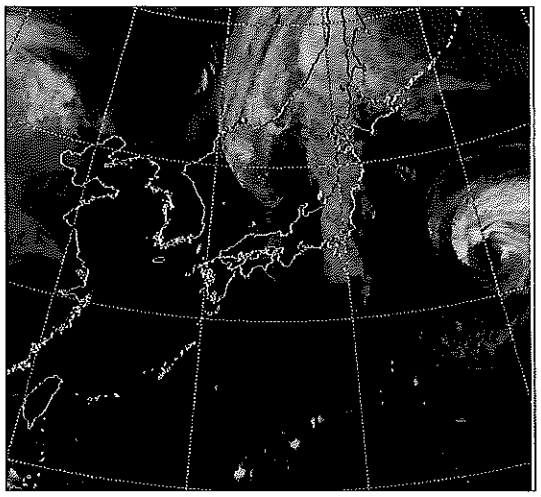
9月9日9時



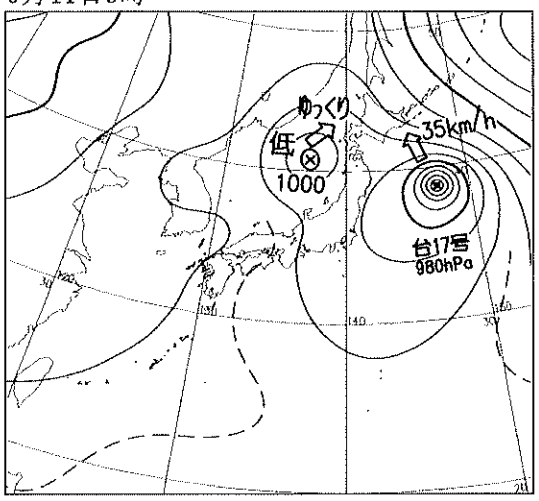
9月10日9時



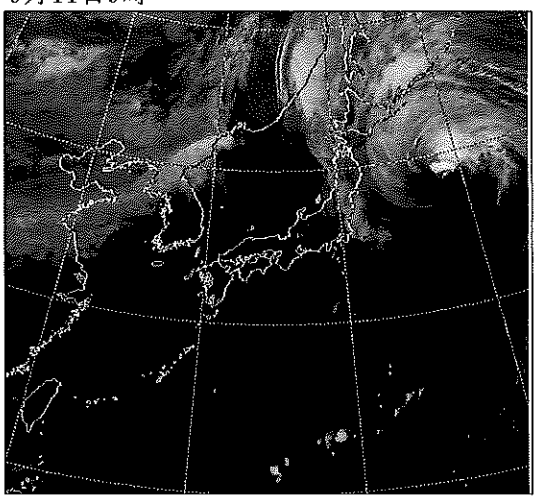
9月10日9時



9月11日9時

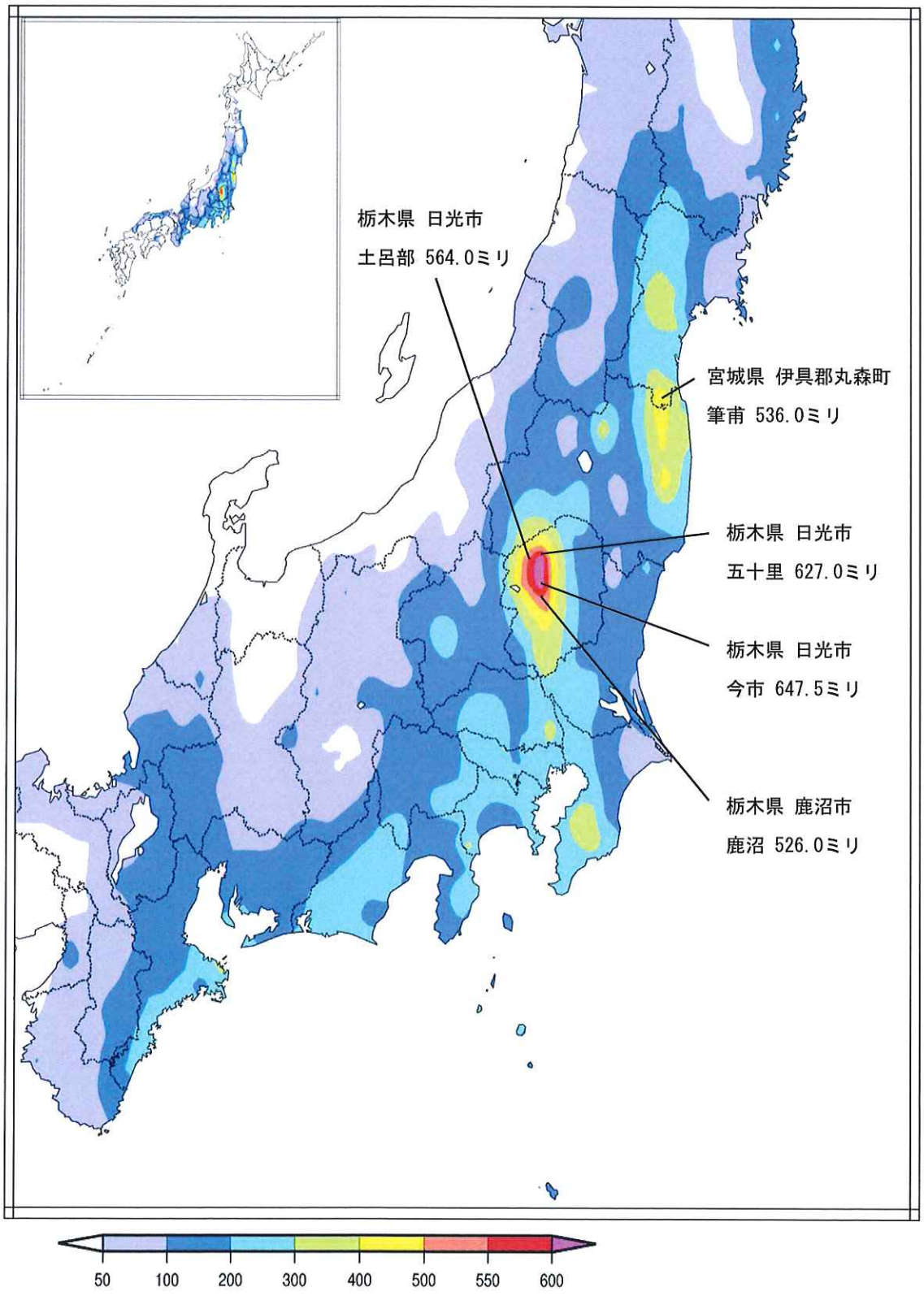


9月11日9時

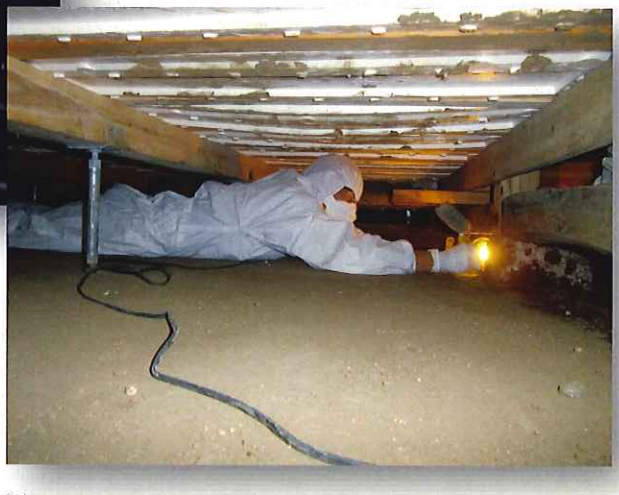


資料３　降水量分布図（出典：気象庁）

総降水量分布図（9月7日～11日）



ギャラリー



EX12

CAT

National

お知らせ
月日曜日　使用者　使用場所
ボランティア
活動保険
加入済の方
受付は左側へ
ボランティア
活動保険
未加入の方
受付は右側へ
①受付
ブース

鹿沼市社

ニーズ班

新聞報道

9万人超 避難指示・勧告

県内大雨

鹿沼で土砂崩れ1人不明

初の特別警報、冠水相次ぐ

台風18号から変わった低気圧の影響で猛烈な雨が降り続いた県内は10日、本県では初めてとなる「大雨特別警報」が出された。各地で記録的な雨量を観測するなど冠水や土砂崩れなどの被害が相次ぎ、栃木市、小山市、野木町など最大15市町で4万7683世帯、9万3380人に避難指示・勧告が出され、避難した住民らは不安な夜を過ごした。鹿沼市で3棟が被害に遭う土砂崩れが発生し、女性が行方不明になっているほか、日光市では排水管のつまりを除去する作業中に男性2人が身動きできなくなり、1人が軽傷、1人が意識不明の重体となった。

濁流に民家が流され、木材加工工場なども損壊した黒川右岸＝10日午前8時20分、鹿沼市玉田町、枝村敏夫撮影

今後、大雨の範囲は移動する見込みで、11日午後6時までに予想される雨量は多いところで80ミリの見込みだが、気象庁や各自治体、消防などは、引き続き河川の氾濫や土砂災害の恐れがあるなどとして厳重な警戒を呼びかけている。

特別警報は、気象庁が東日本大震災などのような重大な災害の危険性が迫っていると判断した際に発表する。2013年8月から運用が始まり、関東で初。

宇都宮地方気象台や県危機管理課によると、降り始めの7日午後6時から10日午後5時までの総降水量は、日光市今市で634ミリを記録し、鹿沼で505ミリ、栃木で415ミリ、小山で325ミリといずれも観測史上最大の雨量を記録した。壬生町の姿川、黒川、小山市の思川、巴波川などで氾濫危険水位を超え、床上、床下浸水被害も相次いだ。鹿沼市の御成橋上流の黒川右岸では民家が濁流に流され、木材加工工場が損壊。日光市で34棟、宇都宮市で6棟などとなった床上浸水は一時、4市で40棟以上に上り、小山市や野木町の広範囲に被害が出た床下浸水は11市町に及んだ。

鹿沼署によると、10日午前3時50分ごろ、鹿沼市日吉町で土砂崩れが発生し、民家3棟が巻き込まれた。同所、小林敏夫さん（65）は救助されたが、同居する妻（63）の行方が分からず消防や県警が懸命の捜索活動を続けている。

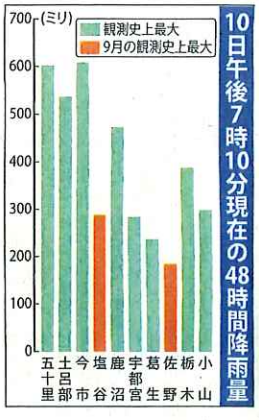
今市署によると、同日午前10時半ごろ、日光市板橋の社会福祉施設近くで、施設職員の男性2人が水中で見つかり、救助された。60代男性が軽傷、20代男性は意識不明の重体。排水管のつまりを除去する作業をしていたとみられる。9日午後、大雨の影響で同市川俣の熊野沢で孤立した建設作業員5人は10日早朝、消防に救助された。けがはないという。

県が10日午前8時に知事を本部長とする災害対策本部会議を開催するなど、各市町が対策本部を設置。鹿沼市で8383世帯、2万3176人に避難指示、栃木市で2万2271世帯、4万3752人に避難勧告が出された。

JR日光線や鳥山線は終日運休したほか、JR宇都宮線も10日午後4時半現在で7割程度の運転にとどまった。道路の通行止めも一時相次いだ。

+NAVI
スマホで動画や写真
詳細は十七ページ

無料ですが通信料は必要です。



下野新聞　H27.9.11(金)

記録的豪雨 爪痕深く

鹿沼で土砂崩れ

「ここまでひどいとは」

日光川俣 取り残された5人救出

10日未明、突然の土砂崩れに見舞われた鹿沼市日吉町、無職小林敏夫さん（65）方。小林さんは約2時間後に救助され、全身を土砂で圧迫されるなど重傷。妻のフミ子さん（63）は行方不明のままだ。県警や消防は二次災害発生の恐れもあるため、慎重に捜索活動を続けている。

小林敏夫さん宅（奥）の1階部分に土砂が流れ込み、妻フミ子さんの安否確認が取れない災害現場＝10日午後0時50分、鹿沼市日吉町、藤田賢撮影

鹿沼署などによると、土砂崩れが起きたのは小林さん方北側の斜面。小林さんは1階で体の一部が埋まった状態で発見された。近くの住宅2棟にも土砂が流れ込んだが、住民計7人は無事だったという。

降りしきる雨の中、警察官や消防隊員ら80人以上が早朝から、重機やスコップを使って土をかき出していた。捜索は午後8時現在も続いている。

近くの男性は「『ザー』と2回、大きな音がして目が覚めた。ここまでひどいとは」と驚いた。

また小林さん方の西隣に住み、自宅の一部に土砂が流れ込んだ吉沢和子さん（65）は「いつも息子が寝ている部屋に土砂が流れ込んだ。きのうは別の部屋に寝ていたが、普段通りだったら危なかった」と話していた。

◇　◇

男性作業員5人が夜通し山中に取り残された日光市川俣の砂防工事現場。

「とにかくほっとしている」。救出された作業員の一人は安堵の笑みを浮かべた。10日早朝、雨脚が弱まったことから救出作業が再開され、全員が救助された。5人には疲労が浮かんでいたが、けがはなかった。

県から工事を請け負った建設会社によると、5人は9日、電気コード類などを片付けるため、現場に入った。その後、急速に雨脚が強まり、対岸から引き返せなくなった。会社側は消防と協力して救出作業に当たったが、増水のため、中断を余儀なくされた。

10日午前5時すぎ、雨脚が弱まり、救出作業を再開。作業はショベルカーで沢に土を盛るなどして、ショベルカーの経路を確保。ショベル部分に作業員を1人ずつ乗せ、慎重に対岸から運び出したという。

作業員は20～69歳の男性5人。その一人（35）は「夜の寒さがこたえた。こちら側にあった小型ショベルカー1台の運転席に年配者を優先的に乗せて、何とかしのいだ」と振り返った。

那須 塩原 鹿の湯

下野新聞　H27.9.11(金)

善意の輪 復旧後押し

ボランティア現地入り
泥出し、片付けに汗

記録的な大雨による災害から最初の週末を迎えた12日、本県の被災自治体には都内など県内外から、多くのボランティアが駆け付けた。浸水した住宅からの泥のかき出しや片付け、ごみの撤去…。「少しでもお手伝いしたい」とのボランティアの思いが落胆した被災者を励まし、復旧作業を後押しした。広がりをみせる支援に、1人暮らしの被災者らからは「ありがたい」と感謝の言葉が聞かれた。

小山

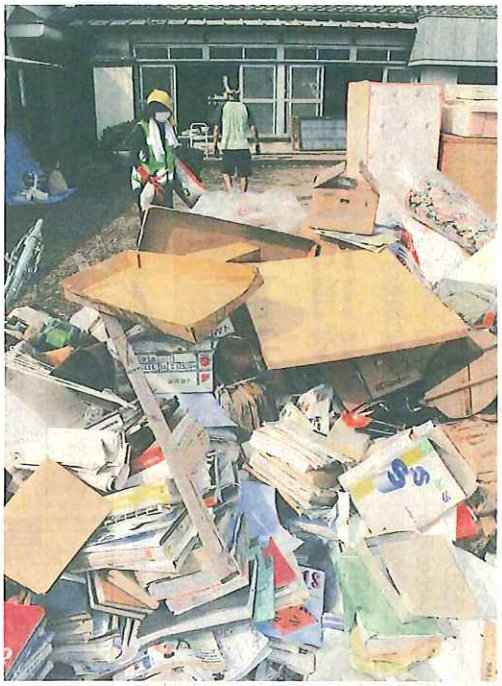
「被害が大きすぎ片付けも気が重かったが、ボランティアに助けられた」。小山市下泉、農業島田昌弘さん（48）の自宅は巴波川近くで母屋、納屋などが水に漬かった。

1人暮らしなので同市社協のボランティアら5人が加わり、作業は加速。ただ農業肥料や農機具は水没し「本当の復旧は先が見えない」と嘆いた。

同市内はボランティア約200人が下泉、押切地区などで支援に当たった。

同市下泉、建設業柏崎伸一さん（59）方に駆け付けた東京都世田谷区、主婦竹内和子さん（57）は「思った以上に泥だらけ。災害直後は人手が必要だから」と汗を流した。

庭は水浸しの家具、本などが山積み。柏崎さんは「くよくよしても仕方ない」と親戚やボランティアなど計15人で前を向き、作業の手を進めた。（栃木沢良太）



庭先に山積みになった家財道具や本などの片付けを支援するボランティア＝12日午後、小山市下泉、栃木沢良太撮影

栃木

栃木市では市内外からボランティア150人が集まり、巴波川の氾濫で浸水した市中心部で泥出しやごみの撤去を手伝った。

同僚と参加した小山市東野田、会社員関修也さん（34）は2軒の片付けを手伝った。「川沿いの被害は深刻。地元のために助けになれば」と汗を流した。

巴波川の目の前に住む同市小平町、パート従業員佐藤由子さん（66）方は庭に木の板や枝が流れ込んだ。掃除機や薬箱も泥に汚れ、「ごみの量が多いのでボランティアが運んでくれて助かった」と感謝していた。

同市社協によると、住民からの支援依頼は53件。このうち26件をボランティアが手分けして対応した。社協は「まだまだ追いつかない。藤岡地域が冠水し、被害が広がる恐れもある」と懸念した。（石崎倫子）

民家の庭に流された木の枝などを片付けるボランティア＝12日午後、栃木市小平町、石崎倫子撮影

鹿沼

西武子川が氾濫し、多くの住宅が浸水した鹿沼市府所本町では、ボランティア約60人が住宅内にたまった泥をシャベルでかき出した。同所は一時、大人の胸の高さまで水に漬かったという。

ボランティアのさくら市氏家、会社員尾沢三佐男さん（48）はテレビで鹿沼市の被害状況を見て駆け付けた。「住民の方の気持ちを考えると胸が痛む。ほんの少しの力かもしれないがお手伝いをしたい」と大粒の汗を流した。

同市社協が募集し、県内外から集まったボランティアは約240人。市内5カ所で浸水した住宅の片付けを手伝った。

近くに住む教員熊倉徹さん（57）は「特に力仕事ができない独り暮らしのお年寄りが困っていた。皆さんの活動は本当にありがたい」と感謝を口にした。（石井賢俊）

県内4市のボランティアセンター窓口
（各市社会福祉協議会）

小山市	0285・22・9501	（午前9時～午後5時）
栃木市	090・7828・4016	
鹿沼市	0289・65・5191	
日光市	0288・21・5577	（午前9時～午後5時。当面は市民のみ対象）

下野新聞
H27.9.13(日)

鹿沼・加園

在日米軍がお手伝い

有志70人 倒木、土砂の撤去作業

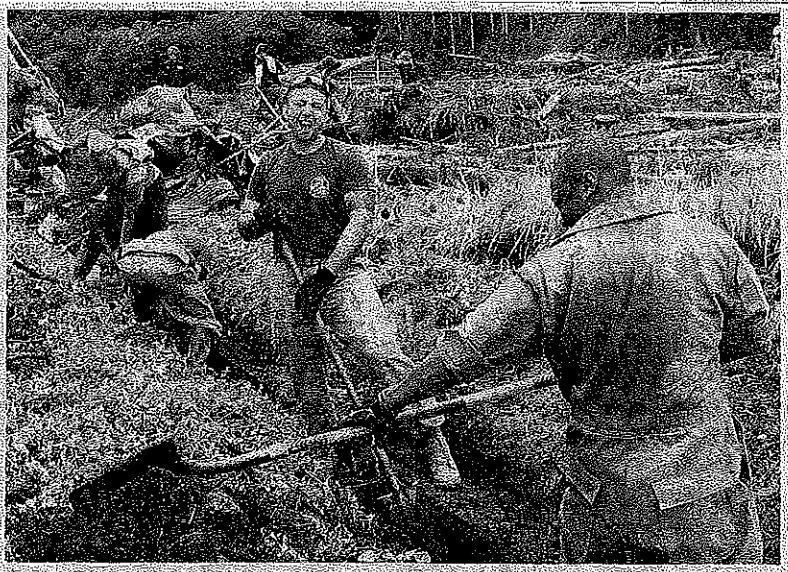
米軍横田基地に在籍する「第374施設中隊」の有志約70人が、鹿沼市加園小周辺で泊まり込みのボランティア活動を行っている。重機を使い、同校付近の土砂崩れに伴う倒木、土砂の撤去作業を担う。活動は15日まで続ける。

同市社会福祉協議会のボランティアセンターに11日、同基地の空軍職員から支援の申し出があった。職員は幼少時、同市内で暮らし、被災を心配していたという。約70人の大所帯で重機を使えるため、同センターが同校近くでほぼ手が付けられずにいた土砂崩れ現場での活動を依頼した。

隊員は休暇を使い、13日朝に自家用車で現場入り。近くの業者などから重機を借り、倒木を細かく切って運搬できるようにし、水田などに流れ込んだ土砂をかき出す作業に汗を流している。同日夜はほとんどの隊員が同校体育館に宿泊。授業が再開する15日まで3日間作業を続ける。

同校によると、倒木や土砂をかぶった水田は、児童が田植えし10月2日に稲刈りをする予定だったという。冬は児童用のスケートリンクにも使っており、星野一行教頭（60）は「米軍のボランティア活動は大変ありがたい。学校のために来てくれたことを感謝したい」と話す。活動最終日の15日は全校児童でお礼の言葉を述べる予定という。

同隊のメインヤー・コリトン・タケヤマ少佐（オペレーション部隊長）は「普段の訓練を生かし、日本の皆さんの力になれてうれしい。きれいにして、皆さんが普段の生活に戻れるよう支援したい」と述べた。（石井賢俊）



土砂の撤去などボランティア活動を行う横田基地所属の米軍有志＝14日午前、鹿沼市加園、石井賢俊撮影

下野新聞　H27.9.15(火)

8212人被災4市で汗

ボランティア、連休に半数

12～24日

記録的豪雨

栃木広域水害

県内広域水害で被害の大きかった栃木、鹿沼、日光、小山の4市に開設された災害ボランティアセンターで、水害発生後の12～24日に活動したボランティアは延べ8212人（速報値）に上ることが、県社会福祉協議会のまとめで分かった。この間、23日まで5連休となったシルバーウイーク（SW）には、全体の半数を超える4376人が早期復旧に向け汗を流した。

県社協によると、各市の人数は鹿沼が最も多く4306人で、栃木1927人、小山1155人、日光824人と続いた。センターの開設はないものの壬生町でも、発生当時に40人が活動したという。

鹿沼の多さについて、センターを開設している鹿沼市社協の担当者は「開設が10日夕方と（他より）早かったことが一因では」と推測。土砂崩れや河川氾濫が広く報道されたことも、影響したとみる。

SW中のボランティアが目立ったのは日光で、総数の75％に上る616人が活動。鹿沼も60％近い254人に上った。

発生から2週間、態勢縮小の動きもある。

日光は25日からボランティア募集を一時休止。泥出しなどへの対応はほぼ終わり、被災者のニーズが今後、孤独感や健康面の不安解消といったものに変わってくるためという。ただ26日に避難指示が解除された芹沢については、近くニーズ調査に入る。

小山は、被害の大きかった大行寺地区に開いていた拠点を23日で閉鎖。ボランティアは受け入れるが、迅速な対応も可能な市内や近隣市町の在住者に協力を求めている。

一方、鹿沼、栃木は「まだニーズがある」（両市社協）としている。

（田面木千香）

被災自治体でボランティア活動した（人）

	12～24日	シルバーウイーク（19～23日）
栃木	1927	848
鹿沼	4306	2549
日光	824	616
小山	1155	363
計	8212	4376

※県社会福祉協議会まとめ。速報値

下野新聞　H27.9.27(日)

鹿沼の被災地でボランティア

宇大生の活動続く

岩手、広島の学生と連携も

記録的豪雨
● 栃木広域水害

【鹿沼】県内広域水害で被災した市内で、宇都宮大生がボランティア活動を続けている。シルバーウイーク（SW）には広島大、岩手県立大の学生と共に活動し、連休明けも数十人が現地入り。当面は9月末まで活動を続けるという。

活動は同大教育学部の長谷川万由美教授（地域福祉学）の呼び掛けなどで始まった。長谷川教授らが学生を送迎し、14日から連日活動している。

鹿沼市社会福祉協議会が設けた災害ボランティアセンターでボランティアの振り分けなどの運営作業に当たるほか、浸水被害を受けた住宅の泥出し作業なども行っている。

SWには広島大、岩手県立大の学生計10人と被災者宅を訪ね、困り事などに耳を傾けた。両大学の地元はそれぞれ2014年の広島土砂災害、11年の東日本大震災の被災地。宇大生とは被災地支援の研修会を通じ、交流があったという。

連休明けの24日も、西武子川周辺で浸水被害を受けた住宅の泥出しなどに20人以上が参加した。25日にボランティアセンターでの作業に当たった教育学部4年伊藤加耶さん（22）は「住宅前のごみなどを見ると、復旧にはまだ時間がかかると感じた」と活動継続の必要性を実感していた。（田面木千香）

資材を点検する災害ボランティアの宇都宮大生ら

下野新聞　H27.9.28(月)

災害ボランティア協力を

鹿沼300人、栃木200人 社協呼び掛け

復旧へ今週末も需要

県内広域水害を受け、鹿沼、栃木の両市で災害ボランティアが不足している。水害発生から約3週間が経過。県内でもボランティアニーズが一段落した地域もあり支援に入る人が減る一方、鹿沼では現在も約40件、栃木では約30件のボランティア派遣の依頼がある。ボランティアセンターを開設する両市の社会福祉協議会は、次の週末の3、4両日とも、鹿沼で約300人、栃木で約200人を集めたいという。（文・写真　田面木千香）

裏山（写真奥）から流れ込み、水気があって重い土砂を片付けるボランティア＝29日午前、鹿沼市下日向

記録的豪雨

○栃木広域水害

29日までに延べ5千人近いボランティアが入った鹿沼市。浸水で家から運び出した家具を元に戻したいなど、発生直後とは異なる内容の依頼、山や川から流れ込んだ土砂除去の依頼も依然寄せられているという。

「市内は黒川、西武子川など複数の河川周辺で浸水被害があったほか、土砂災害に見舞われた所もある」と担当者。県によると、鹿沼市の土砂災害は312カ所で県内最多だ。29日も、裏山が数十㍍にわたって崩れた下日向の民家で、8人のボランティアが土砂除去に当たった。

土砂は場所によって1㍍以上も堆積。連日の作業で敷地周辺には土砂の山がいくつも築かれている。土砂は水気が多く、横浜市から駆け付けた大学3年牧村直輝さん（20）は「重くて思うように作業が進まない」と、汗だくで話した。

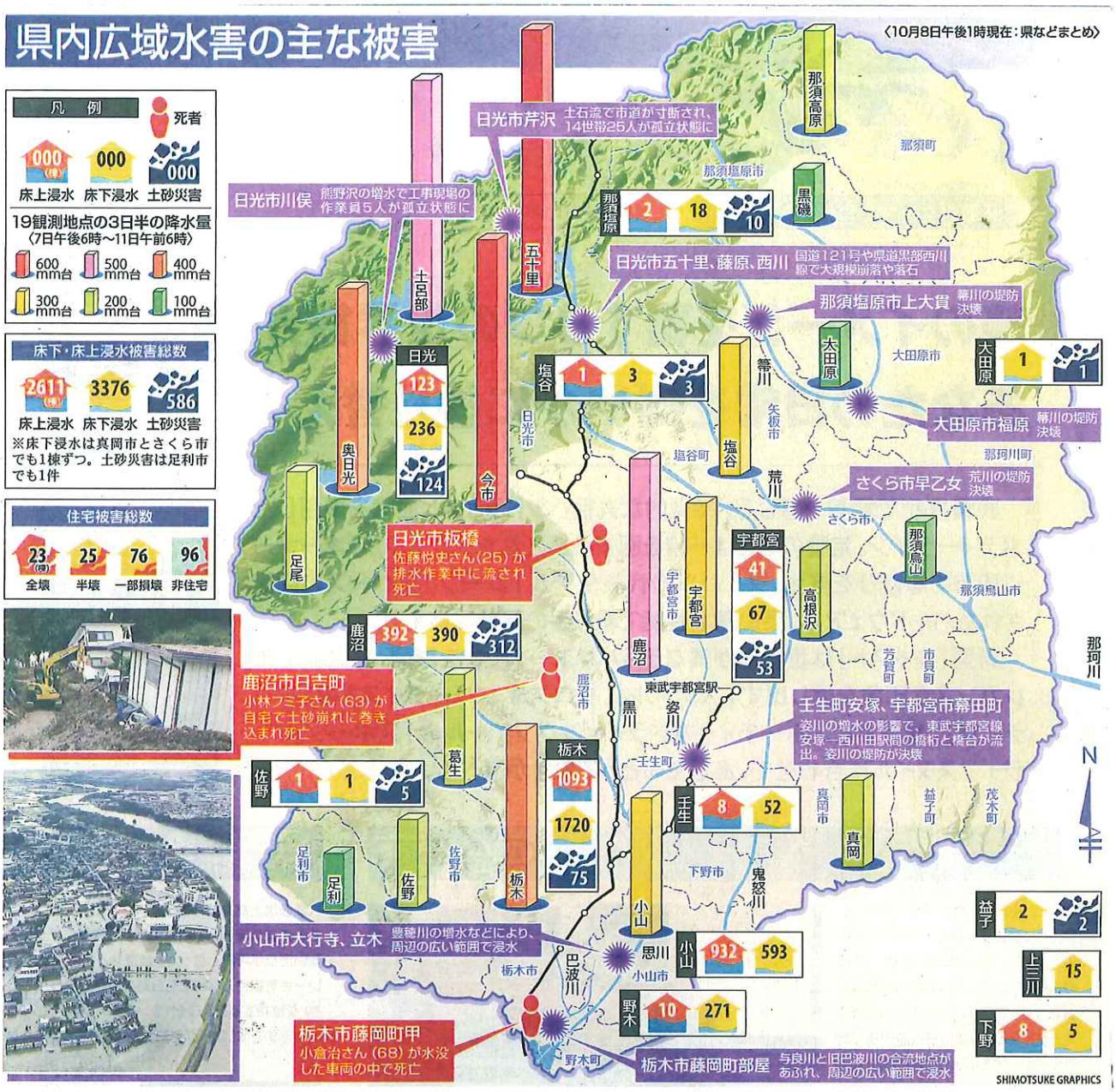
一方、栃木市内は現在、赤津川の氾濫で被害の出た吹上地区のニーズが高く、10件に上るという。

地区内は畑や庭のある敷地の広い家が目立つ。田島昭治さん（87）方も広い敷地に立つ母屋や納屋、蔵が土砂に囲まれ、床上まで浸水した。ハエの湧くヘドロなどは除かれつつあるが、水没して使えなくなった物の運び出しなどは終わらず、この日は6人のボランティアが入った。

田島さんは「いろんな物が流されてしまい、何がなんだか」と途方に暮れながらも「支援は本当に助かる」と繰り返した。

母屋の裏手で水没した物を運び出すボランティア＝29日午後、栃木市吹上町

下野新聞　H27.9.30(水)



下野新聞　H27.10.9(金)

被災4市 ボランティア1万人超 生活相談へ支援移行も

県内広域水害で、災害ボランティアセンターを設置した日光、鹿沼、栃木、小山4市で活動したボランティアは、9日までに約1万600人になることが県社会福祉協議会（社協）のまとめ（速報値）で分かった。

土砂撤去、住宅の後片付けなどの需要は落ち着きつつあり、主な活動を被災者の生活相談に移行するセンターも出始めている。4市社協はセンターを設け、被災者とボランティアとのつなぎ役を果たしてきた。

県社協によると、鹿沼市が最多で5938人、栃木市2512人、小山市1202人、日光市923人。

発生から1カ月近くたち、日光市災害ボランティアセンターは市災害復興支援センターに名称を変え、水害に伴う生活相談に力を入れ始めた。鹿沼市社協は災害ボランティアセンターと並行し、被災者の生活応援窓口を13日、開設する。

（問）日光市災害復興支援センター0288・21・5577、鹿沼市災害ボランティアセンター0289・65・5191、栃木市災害ボランティアセンター0282・22・4457、小山市災害ボランティアセンター0285・22・9501。

（島野剛）

県内で活動したボランティア（速報値）

市町	人数
日光	923
鹿沼	5,938
栃木	2,512
小山	1,202

※県社会福祉協議会まとめ。市町社協が災害ボランティアセンターを設置した市町

下野新聞　H27.10.10(土)

福祉人材育成へ
包括連携協定

宇大と鹿沼市社協

宇都宮大と鹿沼市社会福祉協議会は1日、共に福祉に関わる人材育成などを進める包括連携協定を結んだ。同大と県内社協との協定締結は4例目。

昨年9月の関東・東北豪雨では、多くの同大学生が鹿沼市内で泥出し作業などに当たり、市社協が開設したボランティアセンター運営にも携わった。こうした経緯を踏まえ、協定書には連携内容として「災害時におけるボランティア活動」を盛り込んだ。

同大峰キャンパスで行われた調印式で、石田朋靖学長と池沢光男会長が協定書に署名。石田学長は「協定は新たな地域のニーズに対応するために有意義なものになる」と述べた。

協定書に署名する宇都宮大の石田学長（右）と鹿沼市社協の池沢会長＝1日午前、宇都宮大

下野新聞　H27.11.2(水)

〒322-0043
鹿沼市万町 931-1 総合福祉センター内
社会福祉法人鹿沼市社会福祉協議会
TEL0289-65-5191
FAX0289-62-9361